

複合動詞「～ハツ」の歴史的変遷

池田來未

現代語では動詞「ハツ（ハテル）」を後項にとる複合動詞（以下、「～ハツ」）は状態の甚だしさを表す用法（困り果てる・疲れ果てる）や前項の変化が終了していることを表す用法（成り果てる・消え果てる）が一般的に用いられる。しかし古代語の「～ハツ」には「言い果つ」「聞き果つ」のように前項の動作が完結することを表す例もしばしば存在する。

本研究では「～ハツ」を〈極限状態〉〈変化終了〉〈動作完結〉の3用法に分類し、上代から近代の資料をもとに歴史的な用法変化とその要因を調査した。

調査の結果、〈変化終了〉は上代から近代まで一貫して見られるが、近世以降は〈極限状態〉が増加していくことが分かった。〈変化終了〉と〈極限状態〉はどちらも変化後の状態が持続するという意味的な共通点がある。また〈変化終了〉の中には「皆」など完全性を示す副詞を伴い〈極限状態〉に近い意味を表す例も存在する。このような意味的な類似性と時代的な用例の増減から、〈変化終了〉から〈極限状態〉が派生したと考えられる。また〈動作完結〉は中古中世にはしばしば用いられていたが、〈変化終了〉〈極限状態〉が主流になるにつれしだいに衰退していく。

このような「～ハツ」の用法の差には前項にくる動詞のタイプの違いが影響しているとみられる。さらに〈変化終了〉〈極限状態〉は「ぬ」、〈動作完結〉は「つ」と共起しやすい。この助動詞との共起は、前者が意識的にコントロールしにくい状態の変化・持続を表すのに対し、後者が意識的な動作の完了を表すという特徴を反映しているとみられる。

今後の課題は「～オワル」「～ツクス」など他の複合動詞との競合関係も視野に入れて、〈完遂〉を表す複合動詞群の通時的な全体像を明らかにすることである。